Rakusei NEWSLETTER No. 7 2021.3.12

▼長島愛生園に生きた人びとの証から学ぶ▼

校長 阿南 孝也

『長島愛生園の人びと～ハンセン病、隔離と希望～』展が、立命館大学国際平和ミュージアムで開催されています。貴重な資料が、洛星から徒歩10分の会館に展示されています。多くの人が訪れて、深い学びの機会として生かしてくれることを願っています。

ハンセン病は、かつては「らい病」と恐れられて、世界各国で隔離政策が行われてきました。露出する部位に病変が起こりやすく、偏見や差別の対象となってきました。1873年にハンセン医師によって「らい菌」が発見され、1943年には特効薬「プロミン」が開発されて、治る病となったのです。わが国でも戦後まもなく完治できるようになりました。療養所内に留められた方々は皆、後遺症は残っていても、ハンセン病そのものは完治しています。ところがわが国では、自由と尊厳を奪う隔離政策が、1996年4月に「らい予防法」が廃止されるまで長期にわたり続けられました。

洛星信者宗研グループでは、その年9月の文化祭で「らい予防法」をテーマに展示を行いました。「ハンセン病療養所で直接話しをしたい」との生徒の強い思いが実現し、岡山県長島愛生園を訪問してお話を伺うことができました。長島愛生園は、日本で最初の国立療養所として、1930年瀬戸内海の長島という小さな無人島に建てられました。

入所者へのインタビューの一部をご紹介します。Q「元患者の皆さんの社会復帰に必要なことは何でしょうか？」A「病気はもう治っているのですが、社会の偏見や生活環境が変わったために戻りづらいのです。社会の温かい目がほしいのです」Q「なぜ今まで予防法が残ったと思われますか？」A「一度法律で決定されたことは改正しにくいのだと思います。世論も予防法反対運動が盛り上がらず、政治問題を避ける傾向があったからではないでしょうか」

仏教やキリスト教各派は、予防法廃止が著しく遅れたことに対して謝罪を行いました。不治の病を発病し強制収容された方々が、自らの人生を嘆き恨むことなく受け止めて心安らかに生きてほしいとの願いから、療養所内には、カトリック教会や仏教寺院がいくつも作られました。しかし、「科学の進歩によって不要となった隔離政策を一刻も早く廃止させて、社会復帰を」との運動に繋がらなかったことが悔やまれます。

コロナをめぐり、人権保障、科学的根拠の大切さが求められている今、療養所に隔離された方々の生きた証から学ぶ意味は大きい、そう思っています。

場所：立命館大学国際平和ミュージアム（入場無料）
期日：3月27日（土）まで10時～11時30分、13時～14時30分
オンラインイベント多数（youtube 長島愛生園歴史館チャンネルにて、後日配信）

コロナ渦での気づき、学びが、よりよい社会の実現に寄与することを願います。洛星で学ぶ皆さん、新年度が素晴らしいものとなりますように、良い準備をして臨んでください。